

「腹部超音波診断」

東京都立墨東病院・内科 松田正樹 著

国立がんセンター病院外科

幕内雅敏

腹部の超音波診断および治療は、装置の改良と相まって1970年代の後半に長足の進歩を遂げた。1980年代に入ると医院レベルにまで装置が普及し、これに呼応して超音波診断に関するセミナーが頻繁に開催され、解説書や入門書も数多く出版されてきた。しかし、残念ながらこれらの出版物のすべてが推奨に値するものばかりとは言いがたい。執筆者の大部分が大学や研究施設の関係者であって、どうしてもそれぞれの専門に偏りがちでカバーできる範囲が限定されたり、症例数が少ないために不鮮明な画像の写真が多数使用されていたりする本も散見する。

本書の著者は、特に救急医療に重点を置く都立墨東病院に一般消化器内科医として長年勤務され、多数の症例に接して自ら超音波診断・内視鏡診断・血管造影を行い、これらを用いた治療にも取り組んでこられた。超音波診断については、1978年から本格的に始められ、1980年以来

その研究成果を日本超音波学会でもしばしば発表しておられる。

本書を通読してまず感じたことは一言で言えば、Taylor の Atlas of Ultrasonography 第2版に匹敵するものだということである。超音波像の鮮明さ、症例の豊富さ、取り上げられている臓器の範囲の広さなど、どの面を比較しても勝るとも劣らないのである。最新の知見も十分に加えられており、著者の学識の広さが窺われる。

超音波診断というものを解説するには、definitive な診断が行える点、間接所見のみが診断上有意義である点、超音波検査では診断しえない点、これら3点を明確に分類整理して述べねばならない。それをいかにわかりやすく説明するかについては、小生自身も常々困難を覚えているのであるが、本書においてはそれが実に平明に達成されており、本書は超音波診断の初心者から専門家に至るまで好評をもって迎えられ

のと確信する。

本書の欠点を敢えて指摘するならば、初版本であるため多少の誤植が目につくこと、また超音波診断に際しての各所見の出現頻度や各 criteria における診断率などの記述がないことが挙げられる。しかし、必ずや読者の支持を得て第2版が出版され、上記のような点も補われるであろうと期待している。

私事ながら、著者は小生の勤務する国立がんセンターへ毎月数例の切除可能な肝癌症例を紹介して下さっている。このことは著者の臨床の多忙さと臨床的な実力を端的に示すものと言えよう。臨床に忙殺される立場におられて、300ページ余に及ぶ本を書き上げるには並々ならぬ御努力のあったことを拝察する。丹生谷徹氏をはじめとするベテラン超音波技師の方々も著書の支えとなられ、本書の完成に尽力されたことと思う。優れた医師と技師の存在、その間の親密な協力関係は、臨床医療の基本であり、その意味でも本書は医療に携わる者の良き指針となるであろう。

B5判 350ページ 1985年
定価 8,400円 送料400円

医学書院 刊